研究紀要31集抜刷

「話すこと」のコミュニケーション能力を高める「書くこと」の指導

埼玉大学教育学部附属中学校

肥　沼　則　明

「話すこと」のコミュニケーション能力を高める「書くこと」の指導

英語科　肥　沼　則　明

1　はじめに

「話すこと」と「書くこと」は、共に“表現する”という領域であり、この２つは互いに関連付けながら指導する必要がある。しかし、これまではそれぞれを遊離した形で指導してきた感がいなめない。一方、ここ１、２年、「話すこと」の能力の伸長と話そうとする態度の育成を図るには、適切な「書くこと」の指導が必要である、と考えるようになった。以下、このような考えに至った過程とその後の研究についてふれてみたい。

平成５年度完全実施の学習指導要領では、「話すこと」の第３学年の目標を「初歩的な英語の文章を用いて、自分の考えなどを話すことができるようにするとともに、英語で話すことに習熟し、英語で話そうとする積極的な態度を育てる。」としている。これは、我々中学校英語科教員が中学校の３年間で育てたい生徒のあるべき姿と言えよう。また、個人的にはこれまで、その最終目標は「何の準備もしなくても、相手の言ったことに即応したり、自分の意見を言ったりできること」と考えてきた。そして、その目標に到達すべく、授業において「話すこと」を中心にしたコミュニケーション活動を保証するよう努めてきた。その結果、生徒たちは主体的に活動し、相互に情報を伝達し合えるようになってきた。

しかし、最近、このような「話すこと」のみに重点を置いた活動は、表面上生徒が活発に活動しているようでも、本当にコミュニケーション能力を育成する活動であったのかという疑問がわいてきた。この点については、前文部省教科調査官の和田稔氏も「本当にコミュニケーション能力をつける活動かどうか見直すべきだ。」（平成４年度埼中英研研修会講演）と警告を発しており、最近の英語学習指導の大きな落し穴と考えられる。

そこで、生徒のあるべき（あってほしい）姿を考え、そこへ至るための日頃の学習指導について大幅な見直しをすることにした。そのためには、まずこれまで実施してきた「話すこと」中心の言語活動を見直し、その指導内容が活動の活発化を急ぐあまり、表面的な“上滑り”状態にならないように指導の重点を設定することにした。

2　「書くこと」の重要性

(1) 生徒の実態から

前述のとおり、これまで「主体性」に主眼を置いて、「話すこと」のコミュニケーション能力の伸長に努めてきた。その結果、以前よりも生徒の英語を話そうとする意欲は飛躍的に高まった。しかし、授業中にコミュニケーション活動を行う中で、多くの生徒に次のような問題点が見えてきた。

・話そうとする意欲はあっても、突発的な状況では話せない。
・話せなくなると、他人に助けを求めようとする。
・固定化された表現に頼ろうとする。

一方、上記のような問題点を克服して活発に活動できる生徒には、次のような共通点があることもわかった。

・事前の準備を十分にして、対策を考えている。
・伝えたい内容を“考えて”いるだけでなく、必ず“書き記して”いる。
・発想が豊かで、自分のことばを使おうとしている。

このような生徒は、後の「指導の実際」で紹介する４つの「話すこと」の活動において、まさに自分の活躍の場を得たとばかりに目を輝かせて取り組んでいる。

以上のような生徒の実態を踏まえると、「話すこと」を中心にした言語活動にも、事前の準備と

して「書くこと」の指導が欠かせないということに至る。ところが、これまでの「話すこと」の言語活動では、この辺の指導が意外に軽視されていたのではないだろうか。たとえ「話すこと」を中心にした言語活動でも、自分の伝えたいことを「書くこと」という活動をとおしてじっくりと取り組ませた方が効果があがると考えるのである。

(2) 「書くこと」のもたらすもの

ここで言う「書くこと」とは、いわゆる書き取り練習などではなく、自分が伝えたいことを自分で考えた英文で書き記すことを指す。また、これまで英作文指導の中心となっていた“和文英訳”ともちがう自由英作文ととらえていくことにする。

では、「話すこと」の前提としての「書くこと」の指導はどんな効果をもたらすであろうか。佐野正之氏は「書くことは、単に頭の中の英語を紙に移し替える作業ではなく、内容自体を発見し、構成し、編集していく複雑な過程だと認識することなのである。」と述べているが、これはまさに、生徒が自分の伝えたいことを英語で話すために、事前に「書くこと」によってより具体的な形に表しておくことの重要性を唱っている。特に、中学校段階の学習では、「話すこと」の最終目標へ至る道のりとして、このようなスモール・ステップを踏んだ指導が重要である。これを抜きにしては、たとえ「話すこと」の活動を行ったとしても、実に薄っぺらなものとなってしまう。一方、前述の生徒の実態からもわかるとおり、「書くこと」によって事前に準備できることは、生徒が発話する際の心理的なストレスを和らげる効果が大きい。この点については、本校英語科が行った「なぜ授業中に発言しようとしないのか？」という調査に対して、48%もの生徒が「自信がないから」と答えていることからもわかるとおり、事前の準備が意欲的な活動への必要条件として裏付けられる。

3 研究の方向

(1) 研究仮説の設定

以上のことから、「『話すこと』のコミュニケーション能力を高める『書くこと』の指導」をテーマに研究を進めることにし、次のような研究仮説を設定した。

＜研究仮説＞

「話すこと」のコミュニケーション活動において、あらかじめ伝えたい内容を個人の発想や創意工夫を生かした英文に書き留めさせておいて活動させれば、生徒は自信をもって意欲的に活動し、コミュニケーション能力を伸長できるであろう。

そして、この仮説を実証するために、「話すこと」と「書くこと」の両面を関連付けながら並行して指導していき、その結果として生徒のコミュニケーション能力がどのくらい伸長するかを研究することにした。

(2) コミュニケーション能力の定義

この研究を進める上では、まずその中心となる「コミュニケーション能力」とは何かを明らかにする必要がある。この点については諸々の説があるが、埼大附属中英語科では、Canale & Swain (1980:27) の次の説を採用している。

＜コミュニケーション能力の構成要素＞

- Grammatical Competence (ＧＣ)
- Sociolinguistic Competence (ＳｏＣ)
- Discourse Competence (ＤＣ)
- Strategic Competence (ＳｔＣ)

そして、これら４要素を統合したものがコミュニケーション能力であるとした。

さて、埼大附属中英語科では、「話すこと」のコミュニケーション能力に限定したとき、上記４要素のうちのＧＣ、ＳｔＣ、ＤＣ（ＳｏＣを含む）の３つをその構成要素として重視し、コミュニケーション活動を分析している。したがって、「指導の実際」で取り上げる言語活動についてもこれら３要素を伸ばすものをコミュニケーション活動ととらえている。

また、コミュニケーション能力の育成にあっては、初期の「学習活動」(manipulation)、訓練期にあたる「言語活動」(pseudo-communication)、発展段階の「言語の実際の使用」(communication)の過程をたどると考え、特に中学校段階での指導では訓練期に重点を置き、授業においても継続的に「言語活動」を組み込んでいく必要があることを強調したい。

4　指導の実際

(1) 指導上の留意点

「話すこと」については、これまで数々の指導事例があるが（埼大附属中「教育研究」及び「研究紀要」参照）、ここでは「書くこと」の指導と関連づけた４つの言語活動について事例を紹介する。

これら４つの言語活動は、元来「話すこと」を活動のメインとしてきたものであるが、その指導過程の中で、実はすでに「書くこと」の指導も行ってきている。しかし、「書くこと」の指導にあまり焦点をあてていなかったので、活動そのものにやや上滑りの感があったことを否定できない。そこで、今回の指導にあたっては、研究仮説を証明すべく次の２つの観点から事前指導に重点を置いた。

- あらかじめ「書くこと」によって対策を立てさせておき、突発的な状況を克服させる。
- 細かいミスは問わず、個人の発想を十分に発揮させ、意欲的に取り組ませる。

なお、各活動の成果は「考察」で述べる。

(2) 指導事例

①　教科書のＱ＆Ａ(Sunshine 2 Pro. 11～ 数課)

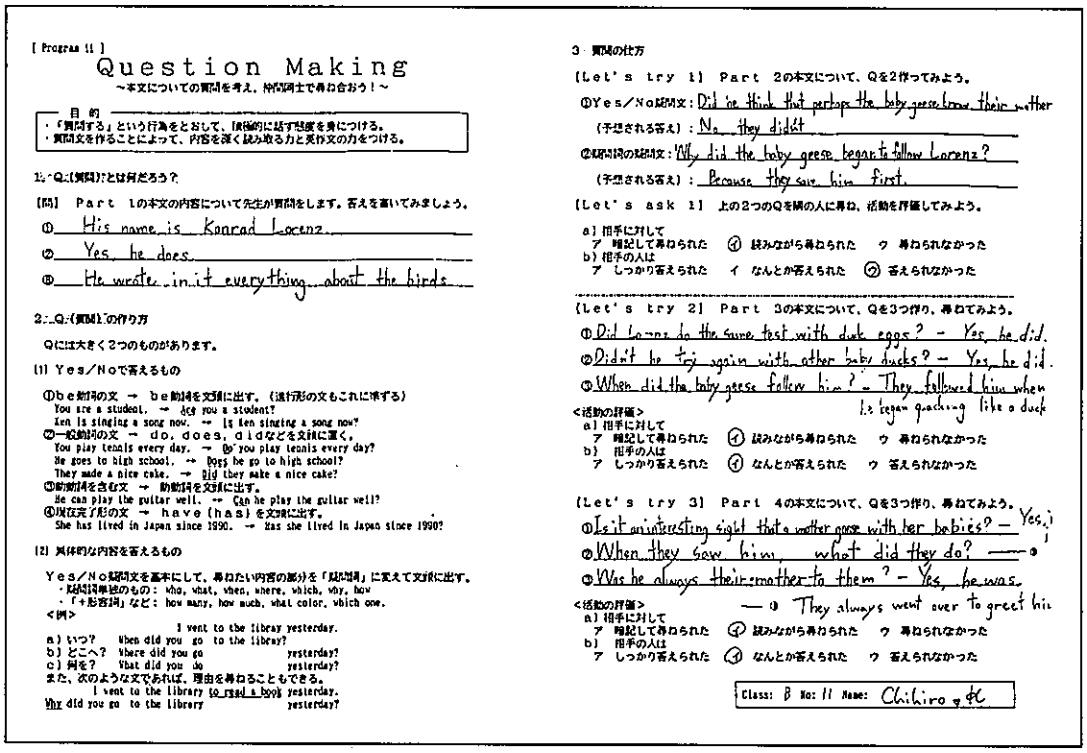
ア　活動の概要

これまで教科書のＱ＆Ａといえば、教師が質問して生徒が答えるというのが一般的だった。しかし、これでは生徒は常に受け身に回ってしまい、自分から話しかけようとする姿勢は育たない。そこで、Ｑを生徒に自由に作らせてお互いに問答し合わせれば、より主体的に取り組むのではないかということをねらってこの活動を始めてみた。

この活動は、生徒にとって身近な教科書を使って「話すこと」のコミュニケーション能力を高めることをねらったものであるが、あらかじめ質問文を作る、予想される答えの文を作るということから、「書くこと」の指導も重要となってくる。

イ　活動の実際

この活動にあたっては、まずそれまでＱ（教師）＆Ａ（生徒）という活動を日頃から十分行ってきていることが前提となる。つまり、どのような視点でＱを作ったらいいのかを示しておく必要があるのである。



[Program 11]

Question Making

～本文についての質問を考え、仲間同士で尋ね合おう！～

目的
・「質問する」という行為をとおして、積極的に話す態度を身につける。
・質問文を作ることによって、内容を深く読み取る力と英作文の力をつける。

1. Q:(質問)とは何だろう？

【問】 Part 1の本文の内容について先生が質問をします。答えを書いてみましょう。

① His name is Konrad Lorenz.
② Yes, he does.
③ He wrote in it everything about the birds.

2. Q:(質問)の作り方

Qには大きく２つのものがあります。

(1) Yes/Noで答えるもの

①be動詞の文 → be動詞を文頭に出す。（進行形の文もこれに準ずる）
You are a student. → Are you a student?
Ken is singing a song now. → Is Ken singing a song now?
②一般動詞の文 → do, does, didなどを文頭に置く。
You play tennis every day. → Do you play tennis every day?
He goes to high school. → Does he go to high school?
They made a nice cake. → Did they make a nice cake?
③助動詞を含む文 → 助動詞を文頭に出す。
He can play the guitar well. → Can he play the guitar well?
④現在完了形の文 → have (has) を文頭に出す。
She has lived in Japan since 1990. → Has she lived in Japan since 1990?

(2) 具体的な内容を答えるもの

Yes/No疑問文を基本にして、尋ねたい内容の部分を「疑問詞」に変えて文頭に出す。
・疑問詞単語のもの：who, what, when, where, which, why, how
・「＋形容詞」など：how many, how much, what color, which one.

<例>
I went to the library yesterday.
a) いつ？　When did you go to the library?
b) どこへ？　Where did you go yesterday?
c) 何を？　What did you do yesterday?
また、次のような文であれば、理由を尋ねることもできる。
I went to the library to read a book yesterday.
Why did you go to the library yesterday?

3. 質問の仕方

(Let's try 1) Part 2の本文について、Qを2作ってみよう。

①Yes/No疑問文：Did he think that perhaps the baby geese knew their mother
（予想される答え）：No, they didn't
②疑問詞の疑問文：Why did the baby geese begin to follow Lorenz?
（予想される答え）：Because they saw him first.

(Let's ask 1) 上の2つのQを隣の人に尋ね、活動を評価してみよう。

a) 相手に対して
ア 暗記して尋ねられた　イ 読みながら尋ねられた　ウ 尋ねられなかった
b) 相手の人は
ア しっかり答えられた　イ なんとか答えられた　ウ 答えられなかった

(Let's try 2) Part 3の本文について、Qを3つ作り、尋ねてみよう。

①Did Lorenz do the same test with duck eggs? – Yes, he did.
②Didn't he try again with other baby ducks? – Yes, he did.
③When did the baby geese follow him? – They followed him when he began quacking like a duck

<活動の評価>
a) 相手に対して
ア 暗記して尋ねられた　イ 読みながら尋ねられた　ウ 尋ねられなかった
b) 相手の人は
ア しっかり答えられた　イ なんとか答えられた　ウ 答えられなかった

(Let's try 3) Part 4の本文について、Qを3つ作り、尋ねてみよう。

①Is it an interesting sight that a mother goose with her babies? – Yes, it
②When they saw him, what did they do? — ③
③Was he always their mother to them? – Yes, he was.
— ③ They always went over to greet him

<活動の評価>
a) 相手に対して
ア 暗記して尋ねられた　イ 読みながら尋ねられた　ウ 尋ねられなかった
b) 相手の人は
ア しっかり答えられた　イ なんとか答えられた　ウ 答えられなかった

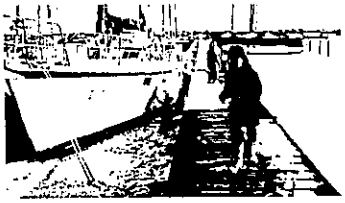
Class: B No: 11 Name: Chihiro

（Ｑ＆Ａ活動入門用：Sunshine 2 Pro. 11）

次のステップとして実際に生徒にQを作らせることになるが、授業中の指導としては次のような点に留意する。

・毎時、授業の最後の５～10分を質問作りの時間にあてる。
・最初は１文から始め、徐々に質問の数を増やしていく。
・答えのすぐ出るものから、行間を読んだり、考えを問うようなものを作らせていく。
・翌時の復習時間でペアで問答させ、互いに評価させる。
・希望者には教師にQを出す機会を与え、自信作を披露させて意欲を喚起する。

ウ　作品例（Further Reading : Part 6）



アムステルダムの運河にて

When we were in Europe, however, we spent almost all our money. I almost gave up our trip, and thought of selling the yacht. Then I remembered the faces of all my friends. I said to myself, "This trip is not only my dream but also the dream of all my friends. I must go on!"

Fortunately, the Japanese restaurant owner in Amsterdam gave me a job in his restaurant.

・Why did he think of selling the yatch?
・Did Mr. Nagae give up his dream?
・Was the yatch sold?
・Do you think he was happy when he was going to sell the yatch?
・Who gave him a job?

エ　評価の方法

この活動の主な評価方法としては、「作品確認法」と「観察法」が考えられる。まず、「書くこと」の能力をみる方法としては、事前及び事後に作品（Q）をチェックするのが一番であろう。また、それに関連した「話すこと」の能力や態度は、活動中の様子を観察したり、答え（A）の記録をチェックすることで評価できる。

②　『What Am I?』（１年生後半から３年生前半まで毎時）

ア　活動の概要

この活動は、埼大附属中英語科の研究「生徒が主体的にコミュニケーション活動に取り組む授業」の一環として平成元年度より全学年で行っているものである。出題者となる個人が「私は何でしょう」というクイズを出題し、残りの生徒が質問をしながら答えを捜し当てるゲーム活動である。

イ　活動の実際

ビデオでゲームの概要を理解させ、教師の作った問題で練習をした後、生徒どうしの活動に移らせる。

・出題者は「 What Am I？カード」を使ってクイズを作成し、事前チェックを受ける。
・毎時授業の最初に２人出題し、残りの者が８グループ対抗で答えを探し当てる。
・質問者に質問点（１点）、正解者に正解点（５～１点）が与えられる。

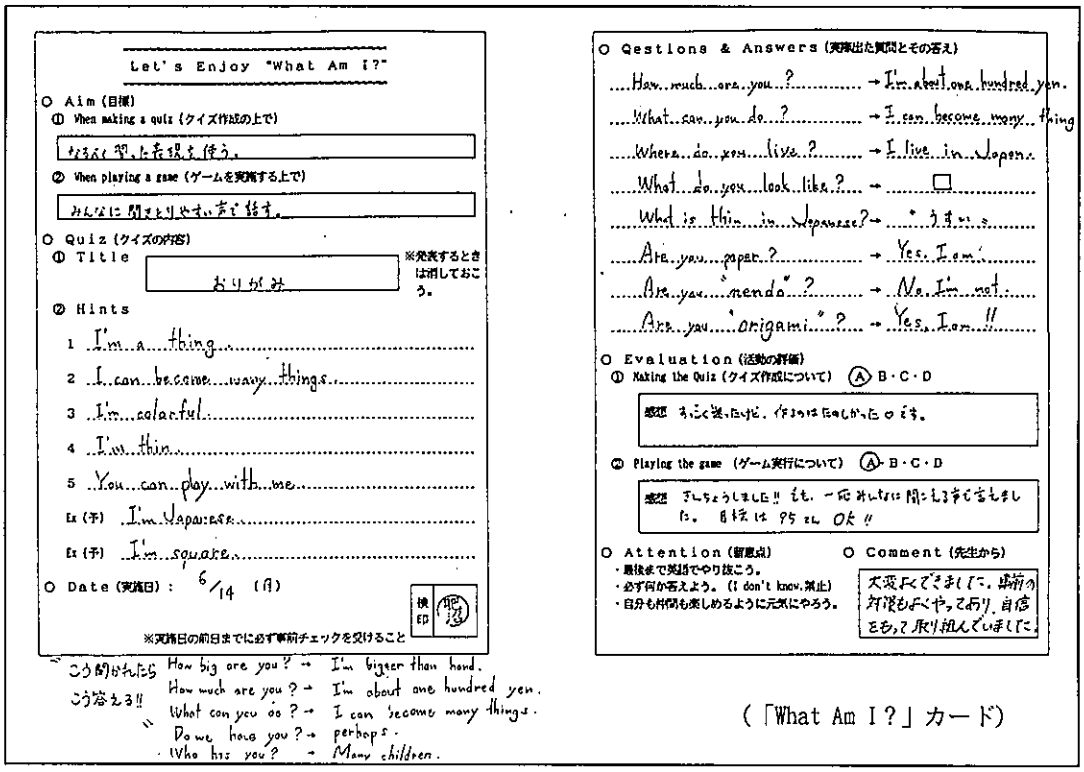
ウ　クイズの作品例（「おりがみ」：２年生女子）

ヒント：1. I am a thing.
2. I can become many things.
3. I am colorful.
4. I am thin.
5. You can play with me.

これまでのカードには、事前に「目標」と「クイズの内容」を書かせていたが、実際の質問に対して戸惑う者が多かったので、今回はこれに「予想される質問とその答え」を書かせてみた。これに対して、上記の出題者は次のような予想を書いてきた。

1. How big are you?
→ I'm bigger than hand.
2. How much are you?
→ I'm about one hundred yen.
3. What can you do?
→ I can become many things.
4. Do we have you? → Perhaps.
5. Who has you? → Many children.

この出題者は、実際に８つの質問を受けたが、そのうち３つは用意してきた文で切り抜けた。



Let's Enjoy "What Am I?"

○ Aim (目標)

① When making a quiz (クイズ作成の上で)

なるべく多くの表現を使う。

② When playing a game (ゲームを実施する上で)

みんなに聞きとりやすい声で話す。

○ Quiz (クイズの内容)

① Title おりがみ ※発表するときは消しておこう。

② Hints

1 I'm a thing.

2 I can become many things.

3 I'm colorful.

4 I'm thin.

5 You can play with me.

Ex (予) I'm Japanese.

Ex (予) I'm square.

○ Date (実施日) : 6/14 (月)

検 ED 昭 浩

※実施日の前日までに必ず事前チェックを受けること

こう聞かれたら こう答える!!

How big are you? → I'm bigger than hand.

How much are you? → I'm about one hundred yen.

What can you do? → I can become many things.

Do we have you? → perhaps.

Who has you? → Many children.

○ Qestions & Answers (実際出た質問とその答え)

How much are you? → I'm about one hundred yen.

What can you do? → I can become many thing

Where do you live? → I live in Japan.

What do you look like? → □

Wha is this in Japanese? → "うちわ"。

Are you paper? → Yes, I am.

Are you "mendo"? → No, I'm not.

Are you "origami"? → Yes, I am!!

○ Evaluation (活動の評価)

① Making the Quiz (クイズ作成について) Ⓐ B・C・D

感想 もっと楽しかった。作るのはたのしかったのです。

② Playing the game (ゲーム実行について) Ⓐ B・C・D

感想 すこしちょうしに乗った!! でも、一応みんなに聞こえる声で言えました。目標は95% OK!!

○ Attention (留意点)

・最後まで英語でやり抜こう。

・必ず何か答えよう。(I don't know.禁止)

・自分も相手も楽しめるように元気にやろう。

○ Comment (先生から)

大変よくできました。事前の対策もよくやってあり、自信をもって取り組んでいました。

(「What Am I?」カード)

エ　解答者への指導

さて、出題者への指導を十分に行っても、解答者となる残りの生徒が活発に質問できなければ、この活動を長期間維持できない。そこで、質問のための色々な表現集を提供する一方、「出題者がI am a man. でクイズを始めました。答えを引き出すための質問を５つ書きなさい。」のような質問作りの練習を定期的に行っている。

そうしたところ、解答者の方も出題の内容によって様々な質問を意欲的に出すようになった。しかも、これまでのように画一化された質問ではなく、その生徒の個性あふれる質問が飛び出すようになった。

オ　評価の方法

この活動でも、「書くこと」と「話すこと」の両面を評価できる。「書くこと」については、出題者の「What Am I？カード」のチェックによってヒントの文の内容・レベルを調べることができる。また、「話すこと」については、ゲーム中の活動（出題者、解答者）を観察し、その様子を記録しておく。

③『できるだけ長く話そう』（Sunshine 2 Program 4～ 数課）

ア　活動の概要

テーマに沿って与えられた「４行対話」（A－B－A－B）を自分なりに工夫してできるだけ長いものにし、ペアで対話し合うというものである。

この活動は、とかく機械的で単調な内容に終始しがちな生徒の談話能力を向上させるのが目的であり、毎時間授業の復習の場面（10分程度）で継続的に行った。ここでは自分が話そうとする内容をあらかじめ質問の側（A）として作文しておくことになる。その際、それぞれ自分が話の主導権を握ることになるが、相手の反応を受けて質問の内容や話題を変えていかなければならないので、柔軟に対応できるような技法の指導も必要となる。

イ　活動の実際

a）<u>基本の対話文を暗唱する</u>

いきなり自分の作った対話文で活動を行うのは生徒に精神的なストレスを与えるので、毎回最初は重要文を含んだ基本の対話文を暗唱するところから始める。

＜基本対話文＞

A:　What sports do you like？

B:　I like soccer.

A:　Any favorite soccer player？

B:　I like Pele.

※下線部は対話作成の際に変更できる部分

b）一組（A－B）だけ対話を加える

対話文作成に慣れるまでは、ステップを踏んで作らせるようにする。そこで、まずはA－Bを一組だけ加えさせて、お互いにどのような話の展開が可能なのかを探らせる期間を設ける。

＜展開（作品）例＞　※記録カードから

○ A:　Oh, I see.　How about baseball？

　B:　I like baseball, too.

○ A:　Did you watch the game yesterday？

　B:　Yes, I did.　Did you？

c）自由に対話文を作らせる

対話文作成に慣れてきたら、できるだけ長く対話ができるように促して対話文を作成させる。個人的には質問や自分の考えを言う文を作成することが中心となるが、相手の反応によって話題を転換できるようにさせることが必要である。これは慣れてくると徐々にできるようになるので、できるだけ多くの機会を与えて行わせたい。また、できるだけ長く話そうとする意欲を喚起するために、対話の長さを記録させ、競争させるようにした。

＜展開（作品）例＞　※記録カードから

A:　Which do you like, soccer or tennis？

B:　I like tennis.

A:　Do you play tennis？

B:　Yes, I do.

A:　Can you play tennis well？

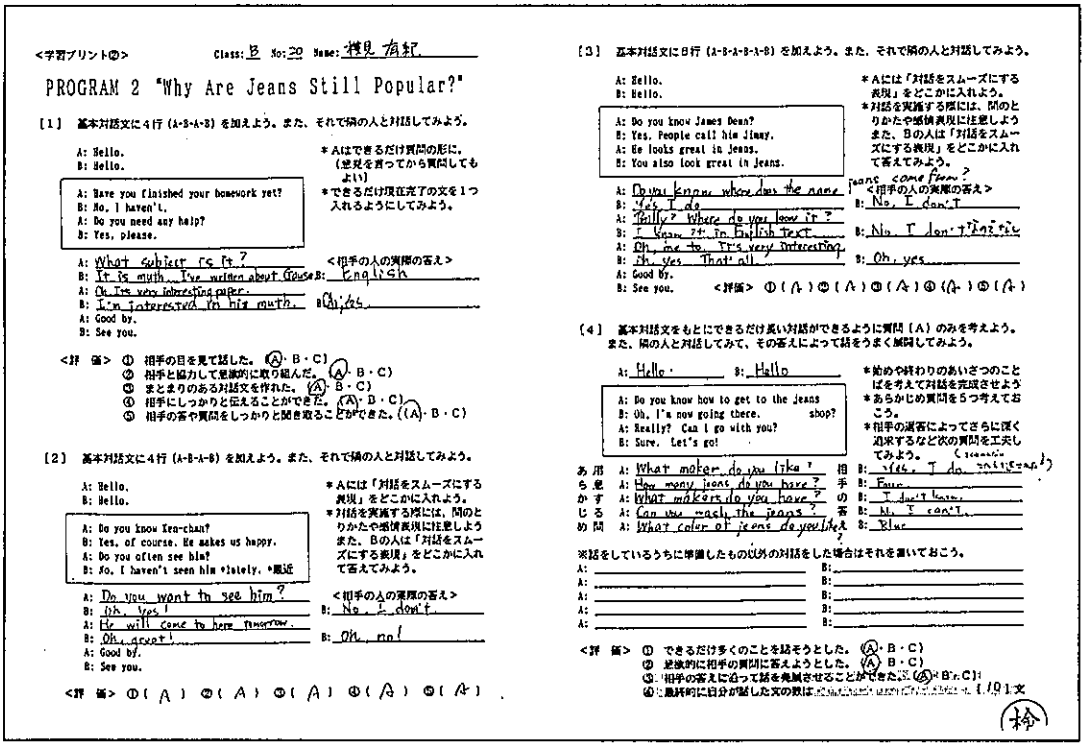
B:　Yes, I can.

A:　Oh.　Let's play tennis after school.

B:　Yes.

ウ　評価の方法

「話すこと」では、活動中に巡回してその様子を記録した。もちろん、一度の活動で全員を観察することはできないので、活動を繰り返す中で全員を評価するようにした。「書くこと」では、活動後に実際にかわされた対話文の記録を全員に提出させて内容をチェックした。



＜学習プリント②＞　Class: B　No: 20　Name: 横見 有紀

PROGRAM 2 "Why Are Jeans Still Popular?"

[1] 基本対話文に4行 (A-B-A-B) を加えよう。また、それで隣の人と対話してみよう。

A: Hello.
B: Hello.
A: Have you finished your homework yet?
B: No, I haven't.
A: Do you need any help?
B: Yes, please.
A: What subject is it?
B: It is math. I've written about Pause.
A: Oh, It's very interesting paper.
B: I'm interested in his math.
A: Good by.
B: See you.

＊Aはできるだけ質問の形に。(意見を言ってから質問してもよい)
＊できるだけ現在完了の文を1つ入れるようにしてみよう。

＜相手の人の実際の答え＞
B: English
B: Oh, yes.

＜評 価＞ ① 相手の目を見て話した。(A・B・C)
② 相手と協力して意欲的に取り組んだ。(A・B・C)
③ まとまりのある対話文を作れた。(A・B・C)
④ 相手にしっかりと伝えることができた。(A・B・C)
⑤ 相手の答や質問をしっかりと聞き取ることができた。((A)・B・C)

[2] 基本対話文に4行 (A-B-A-B) を加えよう。また、それで隣の人と対話してみよう。

A: Hello.
B: Hello.
A: Do you know Ken-chan?
B: Yes, of course. He makes us happy.
A: Do you often see him?
B: No. I haven't seen him *lately. *最近
A: Do you want to see him?
B: Oh, yes!
A: He will come to here tomorrow.
B: Oh, great!
A: Good by.
B: See you.

＊Aには「対話をスムーズにする表現」をどこかに入れよう。
＊対話を実施する際には、問のとりかたや感情表現に注意しよう また、Bの人は「対話をスムーズにする表現」をどこかに入れて答えてみよう。

＜相手の人の実際の答え＞
B: No, I don't.
B: Oh, no!

＜評 価＞ ①(A) ②(A) ③(A) ④(A) ⑤(A)

[3] 基本対話文に8行 (A-B-A-B-A-B) を加えよう。また、それで隣の人と対話してみよう。

A: Hello.
B: Hello.
A: Do you know James Dean?
B: Yes. People call him Jimy.
A: He looks great in jeans.
B: You also look great in jeans.
A: Do you know where does the name jeans come from?
B: Yes, I do.
A: Really? Where do you know it?
B: I know it in English Text.
A: Oh, me too. It's very interesting.
B: Oh, yes. That'all.
A: Good by.
B: See you.

＊Aには「対話をスムーズにする表現」をどこかに入れよう。
＊対話を実施する際には、問のとりかたや感情表現に注意しよう また、Bの人は「対話をスムーズにする表現」をどこかに入れて答えてみよう。

＜相手の人の実際の答え＞
B: No, I don't.
B: No, I don't なのでない
B: Oh, yes.

＜評価＞ ①(A) ②(A) ③(A) ④(A) ⑤(A)

[4] 基本対話文をもとにできるだけ長い対話ができるように質問 (A) のみを考えよう。また、隣の人と対話してみて、その答えによって話をうまく展開してみよう。

A: Hello.　B: Hello
A: Do you know how to get to the Jeans shop?
B: Oh, I'm now going there.
A: Really? Can I go with you?
B: Sure. Let's go!

＊始めや終わりのあいさつのことばを考えて対話を完成させよう
＊あらかじめ質問を5つ考えておこう。
＊相手の返答によってさらに深く追求するなど次の質問を工夫してみよう。

あらかじめ用意する問
A: What maker do you like?
A: How many jeans do you have?
A: What makers do you have?
A: Can you wash the jeans?
A: What color of jeans do you like?

相手の答
B: Yes, I do. (ジーンズ)
B: Four.
B: I don't know.
B: No, I can't.
B: Blue

※話をしているうちに準備したもの以外の対話をした場合はそれを書いておこう。

＜評 価＞ ① できるだけ多くのことを話そうとした。(A・B・C)
② 意欲的に相手の質問に答えようとした。(A・B・C)
③ 相手の答えに沿って話を発展させることができた。(A・B・C)
④ 最終的に自分が話した文の数は 10文

(枠)

(Sunshine 3 Pro. 2 で実施のもの)

④　自由英作文（Sunshine　3　付録読み物）

ア　活動の概要

この活動は、これまで学んできた英語のすべてを駆使し、与えられたトピックで自分の考えを書くというもので、スピーチの原稿作りにあたる。スピーチについては、これまで「自己紹介」や「私の趣味」など身近で具体的なことを発表させてきた。ここでは、より抽象的な議論ができるよう、自分の考えを整理させることをねらった。

イ　活動の実際

この活動は中学生にとって大変レベルの高いものであるので、「読むこと」などとも関連させながら慎重なステップを踏んだ。

・前課の要約文の作成を通じて要点をまとめる練習をした。
・５人の外国人の意見を読んでものごとに対する視点を養った。
・論文の書き方のポイントを学習させた。
・「私の意見」を作文し、お互いに鑑賞し合い、感想を述べ合った。
・「私の夢」を作文し、文集にまとめた。

今回の活動で一番苦労したことは、いかに生徒に自分の考えを‘発掘’させ、それを文章として構成させるかであった。そこで、英語で文章を書くときのポイントとして、文章構成、作文方針、作文手順について学習させた。

a）文章構成

英語の文章を書くときには、どのような構成にしたらいいのか。この点について、教科書の５人の外国人の意見を分析し、次のようなパターンがあることを指摘した。

＜パターン１＞　意見（提案）→具体例→結論
＜パターン２＞　結論→具体例→意見（提案）
＜パターン３＞　具体例→結論→意見（提案）

b）作文方針

文章を書くときには、その目的に応じた書き方があることを学習させた。つまり、「情報を提供する」(Informative) ものと「相手を説得する」(Persuasive)ものである。特に後者では、論理性のある文章が要求されることを学ばせた。

c）作文手順

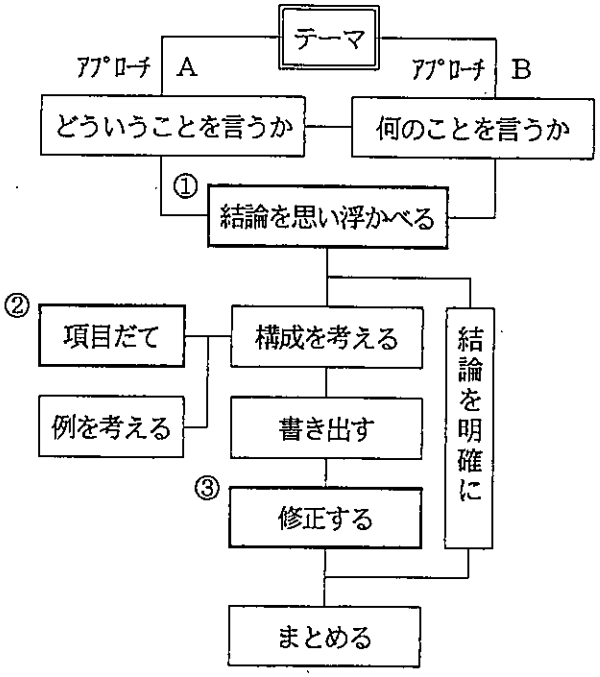
下のようなフロー・チャートを示した。

３　作文手順

とはいえ、実際に書くとなるとどう書いていいのかわからないというのが本当のところかもしれません。

そこで、私が論文を書くとき、あるいは「英語通信」を書くときはどのように頭の中を整理しているかを右図のように表してみました。いつも文章を書くときになかなかうまく考えを整理できない人は参考にしてみてください。

＜ポイント＞
① とにかく最終的に何が言いたのかをおぼろげながらでも思い浮かべることがスタート
② 書き出す前に必ず全体の構成を考える→論旨の流れを項目だてる（各項目に見出しをつける）
③ 書いているうちに少しずつ修正していき、結論へ到達する



ウ　作品例１（「私の意見」）

タイトル: My Opinion to All mothers

Class: A No: 2 Name: Ai Oumi

Thank you for doing the house-work. You always help us and make something for us. I think we can't get along without your help. Because you are most important in family.

These day, women who work at offices and companies are increasing. But I think women have to do the housework.

I hope to become a good mother and good wife. I try to cook and wash clothes these days. So people who will become my husband and my children will be happy!

タイトル: My Opinion to PKO

Class: B No: 8 Name: 大湯 歩

I know your operations a little. But I think your operations are very marvelous and useful to people living in Cambodia. Japanese people say "Your operations are violation of the constitution. The Self Defence Forces should not take part in your operations". But I think Japan should take part in your operations. Because Japan put out only money. But that's not enough. But some countries take part in your operations and useful to many operations.

I want Japanese to take part in your operations and to do various work. First I don't want you to change from PKO to PKF. I don't want you to take part in war. Please hold out to have Cambodia to become a good place that the people live peacefully.

タイトル: My Opinion to ex-Yugoslavia

Class: C No: 14 Name: J. Nakayama

I wonder when you are going to stop fighting each other. I can understand that it is hard after a long history of fighting. But there are many many people suffering. Many innocent people lost their lives. I think war will do nothing good for your country. Our country has been in a war too. Even if I wasn't in it, I can understand how terrible it was. War is the last thing people would want. Please try to stop the war and talk things over. Please bring back the peace you once had. We are waiting for it.

タイトル: My Opinion to people tired of life

Class: D No: 16 Name: Miho Tsuchiya

Sometimes living can be hard. Maybe you have trouble getting along with people, or maybe a slight mistake caused your life to become hell. But life is meant to be hard, and that's why it counts.

You should never think of committing suicide, therefore if you do, it means you're not grateful to god who gave you life.

And remember the bright side. There is always a new tomorrow for every person living. You're not the only one having a hard time. So let's make this life a great one that won't be regrettable.

~ The End ~

エ　作品例２（文集「私の夢」からの抜粋）

☆Ota, Makiko

It has been my dream to be a writer of children's stories. When I was seven years old, I met a very nice story. It name was "A prince of star." I was learned real friendship by the story. And I wanted to go to the Sahara Desert to look for the prince. Then I thought writer is beautiful work. I thought I wanted to be a writer....

Eight years have passed since I made up my mind to be a writer. The determination isn't changes now. I'm thinking it is very nice that everyone feeling warm heart through reading.

☆Bando, Hiroki

I have no dream. Because I've not been unsatisfied with my life now. In fact I have a little hope, but I think it is not a dream.

People usually have a dream that is about future. Future is various. Future is what nobody can guess. So a dream is not future. I'm afraid of a dream, because I am disappointed if dream couldn't come true. Did you have such a experience?

Life is destiny. When it passes, it just passes. Nobody can't change destiny. So I want to let me be.

☆Ayugai, Maya

Have you realized the sky is turning gray? Have you found a clean river lately? Can you guess who makes and dumps that much of garbage?

We are all living on a place which was once beautiful, and happy. But we humans, have made a filthy waste-basket out of it.... We have lost and are loosing many of our precious friends. Not only that, we're troubling ourselves, putting everyone in a celler with no caretaker.

I know how important nature is to us. We don't need so much luxury. My dream is to put us Earthian's heart in one and stop the beautiful life from vanishing, and to create a peaceful world.

☆Goi, Naoki

Why does soccer interest us very much? The sport is loved most in the world --SOCCER. I think that soccer is the simplest and the freest sport. When the players stood on the football ground, the coach doesn't signal to them. They think and play by themselves. They aren't chained to anything and fight to aim at one ball with other ten players. Soccer has no restriction. If you keep the ball in the center of ground, you can do something. You can dribble, pass and shoot the ball. And you can pass forward or backward or sideward. Dribbling is as free as pass.

Soccer has no restriction.--- I love such a style of soccer. So I want to become a worker who works for soccer. Finally I want to say everyone. Soccer is interesting, so I want everyone to love soccer that is interesting.---

５　考　察

(1) 仮説の検証（「活動の実際」から）

ここでは、前節で取り上げた４つの活動のそれぞれにおける生徒の変化を報告する。

①「教科書のＱ＆Ａ」では、活動開始直後はＱ作りに戸惑っている生徒もいたが、回を重ねる毎に要領がわかってきたようである。Ｑの内容については様々で、教科書からすぐに答えを探せるものから相手の意見を問うものまであった。毎回全員が意欲的に自信をもって取り組んでいたが、これはＱ作りの時間をきちんと確保して十分な準備をさせたことと、自分の作ったＱを発表できるという喜びからと思われる。そして、対教師活動でも毎回多数の生徒が積極的に質問を出してくれた。

活動後のアンケートでは、Ｑ作りについて８１％の生徒が「大変だった」と言っている。また、指導する側としては話す力をつけることを目的としていたが、「英作文の力がついた」が５４％で感想のトップであったことは興味深い。「書くこと」と「話すこと」の指導の関連性を痛感した。

②「What Am I？」は生徒が毎回楽しみにしている活動である。しかし、ゲームそのものへの関心が強すぎるきらいがあるので、出題者個人の指導に力を入れた。特に、それまでの経過から予想される質問を割り出し、それぞれについて解答を用意させてみた。その結果、これまでの生徒よりも格段に自信をもって発表し、質問にも的確に応答できるようになった。これは、質問への対策を事前に十分行っていたためと思われる。

この活動は、本校英語科で「話すこと」のコミュニケーション能力を高める重要な活動ととらえているので、今後とも「書くこと」との関連を十分に図りながら改良を加えて実施していきたい。

③「できるだけ長く話そう」は、その性格上、学習指導要領の指導事項のうち、第２学年「話すこと」（ア）「相手の言うことを聞き取って適切に質問したり応答したりすること」を強化するものである。しかし、同時に事前に対話文を作成させることを考えれば、第２学年「書くこと」の「聞いたり読んだりしたことについて、その概要

や要点を書くこと」の指導ができることになる。

さて、この活動をとおして、生徒たちは自分の知りたい情報を英語で得ようとしたり、質問されたことにも積極的に答えようとする態度を身につけてきた。そして、少しでも長く対話を続けようとする意欲と能力を身につけてきた。これは、事前に話したい内容を整理させていたからであり、何の準備もなくテーマだけで対話をさせようとしても、実際には授業中の活動としては成り立たないであろう。

④「自由英作文」には、準備を含めて６時間を費やし、全生徒の素晴らしい作品を得ることができた。作成途中で何度も推敲させることにより、自分の考えを論理的に整理する練習をさせることができた。３年生の学年末ということもあって発表会を開くことができなかったが、その代わりにグループ単位で読み合う時間を設け、お互いに批評し合わせ、優秀作品を選ばせた。この活動は、「初歩的な英語の文章を用いて、自分の考えなどを話す」につながるものとして、その意義は大きかったと言える。

(2) 「準備すること」の是非

これまでの活動を振り返ると、「準備すること」によって「話すこと」の活動は以前よりも地に足の着いたものになった。ところが、依然としてこのようなやり方が本当に「話すこと」の力を伸ばすのかという議論が残る。例えば、突然の質問があったとき、予め答えを用意していたのでは柔軟に対応したことにはならないという考え方である。実際の場面では、ほとんどが相手の質問を予期できない状況で話を進めなければならない。したがって、最終的には訓練を重ねてどのような場面でも柔軟に対応できる能力を身につけさせなければならないであろう。

しかし、これはある程度英語に習熟している者の場合であって、中学校段階では「準備すること」をとおして様々な表現を学習させ、確実な定着を図る必要がある。なぜなら、ここで取り上げた４つの活動のいずれにおいても、生徒自身に事前に十分準備させてから活動させた方が自信をもって生き生きと取り組んでいたとういう状況が見られるからである。

６　おわりに

今回は、「話すこと」と「書くこと」の関連について考察し、「書くこと」の指導が「話すこと」の力の伸長に役立つことがわかった。そして、定期テストにおいても表現しようとする意欲を喚起するような自由英作文を出題したりして、指導と評価の関連を図るようにしてきた。しかし、客観的なデータをもって能力の伸長を測定していないので、今後はPre-test、Post-test の実施などにより、個々の生徒がどのくらい「話すこと」「書くこと」のコミュニケーション能力を高めることができたのかを実証していきたい。

また、本研究は「書くこと」そのものの力を伸ばすことに主眼を置いたものではないので、「書くこと」のコミュニケーション活動の研究としては物足りないものとなっていることを自覚している。今後は、コミュニケーション能力を高める評価のあり方や、他の領域間の指導における相関関係についても研究を進めていかなければならないと考えている。

＜参考文献＞

埼大附属中「教育研究」1992、1993、1994
佐野正之　「Communicative Approachとライティング」『英語教育』Aug.1989　大修館
土屋澄男　「発話に対する生徒のストレスを和らげる」『英語教育』Aug.1991　大修館
和田　稔　「書くことの指導事例」『新学習指導要領の指導事例集４』　明治図書
金子　稔　「和文英訳から自由作文へ」『現代英語教育』Dec.1985　研究社
伊東治己　「コミュニケーション能力とは何か」『ＬＬＡ全国研究大会発表要項』1993